

三年三帝を遠嶋へ遷し奉り、親王を鎌倉へ迎へ權りの幕主となし、北條の氏族執權して天下の政權を握りけるより、朝權はなきが如く、いつしか諸國司も赴任する事なく、郡司・郷長の擬選も絶えて、國廳・郡廳の官舎も破壊し、國府は遂に田舎と成りたるなるべし。おもふに、右加賀古國府の地は實に當國の中央にて、弘仁のいにしへ建國の頃、國守紀末成朝臣等が檢定せられし地なるべけれど、今は邊鄙の僻邑とは成りたり。近く明治八年十月國府村・古濱村の兩村落を合併して、更に古府村と改稱し一村とはなしたり。此の村落は小松町の東方にて、今道一里を隔り、金澤市より南方にて、凡そ今道七里餘を隔る。

○野々市守護廳

國の守護職は、そのはじめ一時の職務なりといへども、世々傳襲して譜第となれり。故に足利幕府に至りては、いつしか藩主の如く、其の國を押領して國主或は領主と呼べり。武備を専務とせし故に、要害の地を見立て城郭を築き居城とす。其の地をば城下と稱し、工商諸職人等群居す。故に城主とも呼べり。按ずるに、城内居住の事は、古令の

軍兵安宅渡に城郭を構へたりといへども、彼をも攻落し畢ぬ。林富樫が二箇所の城を打落しぬれば、北國は今はずの内と可被思召云々と。平家物語には、加賀國へ打越え、富樫・林が城郭二ヶ所焼拂ふ。とあり。又義經記に、辨慶は富樫が館のやうを見て参り候はんと申し、笈とつてひつかけて唯ひとり行きける。富樫が城を見れば、三月三日の事なれば、かたはらにまり・小弓の遊び、かたはらには鳥あはせ、又管絃酒盛と打見わて酒にあひたる處もあり。武藏坊さういなくその内に入りて、侍の縁のきはを通り候て、内をさしのぞき見れば、管絃唯今さかりなり。武藏坊大の聲をあけて、修業者の候と申しける。云々。又太平記延元三年十二月足利高經越前國没落の段に、尾張守高經五の城に火を懸けて、其の光を松明に成して、夜の間に加賀國富樫が城へ落ち給ふ。とあり。又應安二年十二月得田加賀介章彦申軍忠狀に云ふ。北國爲御退治御下向之處。桃井中務少輔凶徒加州平岡野陣取。依及富樫城在野難儀。同二應安八月十五日御發向之間。屬于吉見左馬助殿御手。於野々市日々夜々致合戰畢と。右の狀に富樫城在野と載せたるにて、富

軍防令に、凡縁東邊北邊西邊諸郡人居。皆於城堡内安置云々。其城堡崩頽者。没當處居戶。隨閉修理。とある東邊北邊は陸奥・出羽・越後の地邊にて、此の地邊はそのかみ蝦夷の巢窟なり。然らば國司を初め居民までも、常に城内に居住せしと聞ゆ。日本紀に、大化四年。是歲治警舟柵。以備蝦夷。遂遷越與信濃之民。始置柵戶。など見えたる警舟は越後國警船郡にて、和訓栞に、説文に城以盛民也と。柵も同じ。といへり。柵戶は城附の民戸なり。按ずるに、威奈大村墓誌に、慶雲三年。命兼太政官左小辨。越後北疆衝接蝦夷。柔懷鎮撫尤屬其人。同歲十一月十六日。命卿除越後城司。と見え、出羽城介は出羽介にて城司を兼ねたりといへり。是等の事共にて、出羽・越後等の國司は、上代より城郭内に居住して防禦せし事知られけり。さればにや、中古守護職の居館を城とも呼べり。源平盛衰記壽永二年五月安宅合戰の段に、富樫次郎家經は黑絲威の鎧に鶴毛の馬に乗り、三十餘騎にて落ちけるが、平家は林富樫が館に打入りて暫く爰に休み居たり。是より飛脚を都へ立つ。其の狀に云ふ。五月二日加賀國へ亂入る處に、源氏の

樫城は石川郡富樫郷野々市なる富樫氏の館なる事知られけり。此の館は野々市にある故、或は野々市館とも呼べり。三州志古墟考に、元龜元年五月賊黨富樫館を火攻す。富樫泰俊其の子二人と越前溝口長逸が城へ走る。爾後凶賊此の館址に據りて築（ましか）か。天正八年柴田勝家加州の諸堡を攻め居る時、若林雅樂助・同甚八郎是に據るを勝家謀りて殺し、勝家即ち居する事、織田軍記に見ゆ。太田和泉守日記には、天正八年閏三月九日勝家官腰に陣し、所々に放火す。仍りて賊野々市の堡に河を前にして據るを追拂ひ、多く斬り捨て、數百艘の艦に軍糧を取入れさせ、夫より奥へ焼入る。とあり。平次按ずるに、北陸七國志に天正八年閏三月九日勝家布市の城に楯籠り（盾籠り）、一揆悉く追拂ふ。と見え、寛永八年山崎長門が家士笠井藏人入道軍功書に、當國野々市柴田破り被申時首一つ取る。と載せたるも同時の事なるべし。又天正軍記に、天正十三年八月豊臣秀吉越中國出馬の時、湊川の大河を越え松任に至る。源の義經辨慶が謀事にて越え給ふ富樫が館を返り見て、金澤につく。とあるも、野々市の館をいへるもの也。三州志古墟考に云ふ。藤原利仁將軍より七世富樫二